

## 形式的立場のルール

### 「人」と「論」の区別

形式的立場とは、自分の立場とは関係なく、肯定、否定のどちらかの立場に立つということです。このルールによって、「人」と「論」を区別することができます。誰が意見を言うかより、どんな意見が出されるかが問題になります。

この区別が、とても大きな威力を発揮します。それは、我々日本人の討論では、「論」より「人」が強調されがちだからです。何を言ったかよりも、誰が言ったかに関心をもたれるからです。そのため、人間関係が問題となります。「こんなことを言ったら笑われないか」「こんな反対意見を言ったら、あの人を傷つけるのではないか」という心配が前面に出てしまいます。論理よりも心理に関心をもたれるからです。

ディベートでは、実際に自分はどうか考えるかに関係なく、形式的にどちらかの立場に立つことが求められます。普通の討論では、自分がどうか考えるかが問題にされます。誰が何を言ったかが問題になるのです。それに対しディベートでは、何が言われたかという事柄に焦点がいくわけです。

### 言葉を返す

我々日本人は、言葉を返すこと自体をわるいと考え精神的風土で生活しているのではないのでしょうか。「お言葉を返すようですが」というフレーズもあります。言葉を返すことそのものをわるいと考えて、相手が言っていることがよく分からなくても、相手が言っていることに納得できなくても、何も聞き返さないという状況があるのではないのでしょうか。

「知に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかく人の世は住みにくい。」夏目漱石の『草枕』の冒頭の部分です。現在もまだまだ住みにくい状況は変わりません。それは、日本社会が「知に働けば角が立つ」社会だからです。言葉を返すことをよくないとみなす社会だからです。

これは、我々日本人の話し合いが、自分とは異なる他者に自分の考えを伝え、相手の考えを変えろという性格ではないからです。相手の考えとの相違をできるだけ隠し、あいまいなままにしておきたい心理が強く働くからです。特定の誰かに向かって話すのではなく、自分の考えを相手のいないところで話す独白的な性格が強いものだからです。

日本社会は、同一性を原理とする社会です。相手と自分の差異をできるだけ露わにしないことを前提にした社会です。このような社会で討論をしても、お互いにパンチを出さないでもたれ合っている状態が多くなります。

意見を言う人の人格と意見内容としての論が区別されません。論を批判することがその人の人格の批判とみなされがちです。だから、他者の意見を批判できません。後に尾を引くと考えてしまうからです。

したがって、「人」と「論」が区別できるようになればいいのです。意見を言う人と、その意見の内容を区別する形式をつくれればいいのです。誰が意見を言ったかよりも、どんな意見が出されたかが重要な形式をつくれればいいわけです。そうすれば、安心して思ったことが言えるようになるのではないのでしょうか。

そのような形式こそがディベートです。ディベートは「人」と「論」を区別できない日本人にとって、きわめて適切な討論形式と言えます。